

MIAO

創立40周年記念事業

2021年度港ユネスコ協会40周年記念シンポジウム

地域が育てる自然保護区 —ユネスコエコパーク—

日時:2021年11月19日(金) 18:30~20:30

会場:国際文化会館講堂およびオンライン配信

◆コーディネーター

永野 博 (港ユネスコ協会会長)



港ユネスコ協会では毎年一回、「平和を考える」シリーズとしてシンポジウムを開催してきた。第1回は「気候変動」、第2回「国連海洋科学の10年」、そして第3回の今年は、日本がユネスコに加盟して70周年、MAB計画50周年になるのを記念して、「ユネスコエコパーク」を取り上げる。

◆田口 康氏

(文部科学省国際統括官)

当日、2年に一度のユネスコ総会に出席するためパリに滞在中。Zoomにてご挨拶:



パリは今、朝の10時半で、私はユネスコ本部の第1会議場(総会のメインセッションの会場)にいます。本日の午後からここで「ユネスコ/日本ESD(持続可能な開発のための教育)賞」の表彰式(写真)を行います。今年は、我が国の加盟70周年だけでなく、ユネスコの設立75周年でもあり記念行事も行われています。

◆岡本 彩氏

(文部科学省国際統括官付)

日本ユネスコ国内委員会事務局
ユネスコ第三係長)



国連海洋科学の10年も始まり、いろいろな節目の年。地球と人間、SDGsについて考える良い機会と思う。ユネスコ総会では11月3日を生物圏保存地域(ユネスコエコパーク)国際デーにすると決定した。都市部の住民の方々もエコパークなどの生態系の恩恵を受けてい

ることを念頭に置いて頂きたい。港ユネスコ協会でこのような取り組みをして下さるのは非常にありがたいと思っている。

◆パネリスト

磯田博子氏

(筑波大学生命環境系/地中海・北アフリカ研究センター教授)



UNESCOのMAB(Man and the Biosphere人間と生物圏)計画とは、自然の恵みを守り、合理的かつ持続可能に利用するためのユネスコのプログラムである。人間社会と環境の両方をよい状態に保つために、自然資源を持続可能に管理する人々の能力向上を目指す。MAB計画の中でも、生物圏保存地域(Biosphere Reserve、略称BR、日本での通称「ユネスコエコパーク」)が主要な活動である。

世界の131か国が加盟、日本では10か所が登録されている。白山、大台ヶ原・大峯山・大杉谷、志賀高原、屋久島・口永良部島、綾、南アルプス、只見、祖母・傾・大崩、みなみ、甲武信である。エコパークの審査基準は3つの機能:(1)生物多様性の保全(2)経済と社会の発展(3)学術的研究支援であり、各地域は(1)核心地域(2)緩衝地域(3)移行地域とのゾーニングがなされている。

さらに審査基準はふさわしい計画、組織体制、ネットワークへの参画を定めている。最近の動きとして、MAB戦略(2015~2025年)が定められ、その効果的実施のための具体的な行動計画としてリマ行動計画(2016~2025)が採択された。

私たちは今年3月、日本のエコパークのさらなる推進に向けて、提言を取りまとめた:(1)ユネスコエコパークの質の強化(2)オープンかつ参加型の活動の推進(3)意義・価値のさらなる発信、を3本柱とする。11月3日がユネスコエコパーク国際デーとして採択されたのは嬉しいニュースだった。国際地質多様性の日(10月6日)も制定された。今後はこれらの国際デーを祝福したイベント等の開催が期

我が国のユネスコエコパーク



日本ユネスコエコパークネットワーク(JBRN)を構成
交流や学びあいを通じて、各地域の質向上に努めている。

待される。

私は生物資源を対象とした機能性研究にも携わっており、生物多様性の評価、基礎研究への貢献、新産業創出を通じてSDGs目標9「産業と技術革新の基盤を作ろう」と、目標17「パートナーシップで目標を達成しよう」につながると考える。

◆パネリスト

酒井暁子氏

(横浜国立大学大学院環境情報研究院教授)



「生物圏」は、「生態系」「自然環境」とほぼ同義で使っている。人為的影響によって自然環境の劣化が世界規模で進行している。現代は第六の大絶滅時代と言われる。人間とその社会は自然環境に完全に依存している。生態系を大切にしなくてはいけない。この気付きは1970年代からあり、自然環境の保全の中で経済発展があるべきで、何はともあれ生物の多様性を守ろうという考え方方が進んでいる。

日本は生物多様性の豊かな国だが、それでも多くの種が絶滅に瀕している。様々な保護政策が取られ、自然保护地域が設定されている。自然保护地域の分布を見ると保護のかかり方には地理的な偏りがあるのが分かる。高標高は手厚い一方、低い地域は守られていない。しかし平野や里山にも豊かな生物多様性が見られる。人間が長年手を入れてきたことではぐくまれる2次的な自然に、生物も適応してきた。こういう地域を守るはどうしたら良いか?

自然を守る2つのアプローチを考えられる:

(1)原生またはこれに準じる自然や動植物の保護(2)身近な空間における自然の保護と回復。(2)は自然を「使いながら・使うことで」守っていくという発想で、大きな変革が求められ、特に難しい。これを考える一つの枠組みが「ユネスコエコパーク」になろうかと考える。

私たちが活動を始めた初期の頃、パリ本部にどこか参考になる地域はないかと尋ね、ドイツのレーン地方を紹介

「自然を守る」2つのアプローチ その1

①原生又は準じた自然や貴重な動植物の保護
国立公園／自然公園／世界遺産
文化財:(特別)天然記念物指定、(特別)名勝

②身近な空間における自然の保全と回復
人間・生き物にとってかけがえのない自然環境の確保
(歴史的／文化的／貴重性……)
里山生態系／田園景観の保全／ビオトープ
／多自然型川づくり／環境保全林

鈴木邦雄(横浜国大元学長)氏スライドより

された。空から見ると畑はいろんな形で方向もバラバラだが、土地の起伏に添った作り方をしており、多様な品目・品種を作っている。発展から取り残された分、絶滅危惧種の宝庫になっている。豊かな風景や生物相が残り、それをエコパークの枠組みの中で再評価し、地域振興に繋げよう、それが人と自然の双方に利益をもたらす、というコンセプトで運営されている。カギとなるのは伝統的な農業。しかし一番大切なのは、地域アイデンティティーの醸成である。

この地方のヒツジは40頭まで減ったことがあるが、現在は3,000頭まで増えた。古来からのリンゴの品種を育て、用



途を研究している。ビオナーデという清涼飲料水の会社はレーンで生まれた会社。ユネスコエコパーク事務所が仲介して、農畜産家、企業、行政が組織的・戦略的・多角的に事業に取り組み、一般市民も参加する。空気が綺麗で本当に素敵なところで、私も住みたいと思ったくらいだった。

誰がどのようにゾーニングを行い、活動をハンドリングするのか?世界基準があり、各国がその実情に合わせてルールを作っている。日本では「地方自治体を中心とした構成」との一文が入ったことが大きなポイント。地方自治体の方向性とユネスコエコパークは親和性が高い。福島県只見は町の政策の中心にユネスコエコパークがあって、自然と共生する暮らしの有様と長年の取り組みが評価され、「只見ユネスコエコパーク」に登録された。

ネットワークの重要性は最初から認識されており、地方自治体によるネットワークや国際ネットワーク会議が語り合い、協力を目的とした貴重な場を提供している。日本は東アジアネットワークの一員で、写真に集っているメンバーは、中国、韓国、北朝鮮、ロシア、インドネシア、ベトナムの代表。この光景を見たとき、世界の希望がここにあると思って感激した。

永野:ユネスコのイリーナ・ボコヴァ前事務総長の言われた「世界遺産は、価値を保存する概念。ユネスコエコパークは、価値を創造する概念」は的を得たセリフですね。



◆ママードウア・アイーダ

(Aida Mammadova) 氏 (金沢大学国際機構准教授。
2019年ユネスコMAB若手科学者賞を受賞)



私はアゼルバイジャン人、旧ソ連から
30年前に独立した国で、日本から
8,000km程離れている。日本には15年
くらい滞在しており、ユネスコエコパーク
(BR)には2015年から関わってきた。

2017年ユースフォーラムに参加、2019年若手科学者賞を
受賞した。登山が趣味で、BRやジオパークに登録された山
も多く訪れ、趣味と研究を兼ねて楽しく過ごしている。

ここ石川県には、白山BRの他にも国際的に認定された
地域がある。例えば金沢ユネスコ創造都市や能登世界
農業遺産など。白山BRは1980年、日本で最初にBRに指
定されたが、トップダウンの決定だったので地元の人々は
ほとんど関心がなかった。2016年に地域が拡張され、地
元住民の生活する場所が移行地域に含まれた。これ以後、
地元住民との交流がしやすくなった。

白山BRは、白山手取川ジオパーク(GP)と重複している。
BRもGPもSDGs達成を目標としているが、多様なステーク
ホルダーとの連携が重要である。日本BRの課題は多い。
例えば、後継者や若い世代の不在、雇用の減少、過疎化
と高齢化、ガバナンスの問題、など。BRとGPはSDGsの目
標を達成出来るのか、疑問になる。

この疑問を念頭に置いて、金沢大学で「ユネスコエコ・
ジオパーク」教育を始めた。教育目的は、地域課題・文化・

持続可能な発展(SDGs)を学ぶ地域自治体や地城市民と連携し、教育を行う世界のネットワークと連携すること。
2015年度に始動した本プログラムは、これまで世界からの
べ350名、20か国以上の参加実績を持つ、外国人留学生
に人気のプログラムとなっている。2019年2月、白峰に「金
沢大学国際機構SDGsジオエコパーク研究センター」が
開設された。

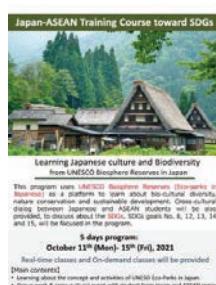
自治体や地城市民との連携



金沢大学はロシアの6つの大学と連携している。付近
の5つのエコパークに日本人学生100人を派遣して地元
住民と交流した。ヴォルガ・カマBR、ヴォルガBR、アルタイBR、
カツンスキーブR、極東海洋BRである。アルタイBRは面積
が非常に大きく、白山BRよりもゼロが多い。

2年前からオンラインで、みなかみ、綾、大台ヶ原・大峯山・
大杉谷との国内連携を開始、関係する大学とも連絡を取
って、日本大学間MABネットワークを立ち上げた。国際ネ
ットワークとしては、中央アジア(カザフスタン、ウズベキスタン、
キルギスタン、タジキスタン)との連携を広げた。しかしこ
れらの国のBR周辺状況は日本とあまりに違うので、ヨーロ
ッパ寄りに視線を移し、ノルウェー、エストニア、ラトビアに研
修コースを広げた。この3国で一番新しいのは、ノルウェー
のノードホーランドBR。住民の希望によるボトムアップで
2019年に登録された。一方、エストニアの西エストニアBR
は、何百年も前から住民がBRらしい活動をしてきたのが
認められて30年前に登録された。東南アジアにも研修コ
ースを広げ、ASEAN大学ネットワークが出来た。コースを
卒業すると、このような終了証を必ず出す。

何故こんな活動をするか?日本の集落には若者がいない。
若い人たちに集落に行って生活をスタートしてもらいたい。



ASEAN 大学ネットワーク(AUN) + SUN/SixERS国立六大学連携コンソーシアム



ネットワークを広げて若い人たちを巻き込み、エコパークだけでなく他のユネスコ活動にも貢献できる若者を育てたい。

◆総合コメントーター

松田裕之氏(横浜国立大学教授)

MAB(Man and the Biosphere)という名称は何故 Manなのか、PeopleとかHumanに変えられないのか、とあちこちでよく言われるが、PABやHABになってしまって、50年来MABでやってきた人たちには抵抗がある。MABは変えられない。岡本さんが言わされた通り、都市の人がエコパークや地方の自然のことを考えるのが今、大事になっている。東京都市圏は、みなみBRと甲武信BRの水源に依存している。利根川と多摩川である。横浜の水源は相模川。磯田さんから「生態系サービスへの支払い」という言葉が出たが、要するに我々は自然を守るために幾ら支払いますか、ということ。生物多様性条約のキーワードになっている。

私の選んだ「今日の絵」はガリー・ラーソンの風刺画。

野生の生き物を瓶詰で保存するという風刺で、保護区に閉じ込めるという発想。一方、MABが使っているのはこれとそっくりのこちらの絵。瓶を開けてオープンな場に生き物が大勢いる。価値を保存するための世界遺産。それに対してオープンな場で価値を創造するのがMAB計画である。もう一つの特徴は、世界遺産は加盟国政府が守るのに対し、ユネスコエコパークは地元の人や自治体がどう取り組むかを見ている。

「人と自然の共生」と日本ではよく言うが、この考え方とMAB計画とはよく合っていると思う。このコロナ禍において、「野生の動物と接触するから感染症が流行った」という動きがあるが、野生動物と人間が棲み分けなければ解決する問題ではない。例えば、「森が豊かであればクマは町なかに出て来ない」と言われるが、クマにとっても農作物の方が食べやすい。野生動物と人間はお互いに「怖い」と思っているからこそ共存出来る。この点をご理解頂きたい。

◆質疑応答

田部: ユネスコエコパークはイデオロギーや国境を超えて協力出来る点が素晴らしい。是非発展してもらいたい。今日は陸上の話が多かったが、海については?



松田: 陸や島とそれを取り囲む海を登録しているBRは数多い。海の中も、利用しながら持続可能に獲る、守りながら獲るという発想です。屋久島の場合、世界遺産としては陸地だけ、エコパークとしては海も入る。私の野望は、奄美・琉球の海も含めてエコパーク登録することである。

森村: ウィルドライフが好きで、アフリカのサバンナとか、最近はロシアのカムチャッカを訪れた。野生動物との共存はうまくやっているように見えたが、日本では最近クマが殺された例もあり、遅れているのでは?

松田: 日本は野生動物の宝庫である。実のところ、あまりに多くて数のコントロールが出来ず、残念ながら鹿もサルも獲っている。土地がもっと広ければこんなことも少ないかもしれない。逆に、先進国的人が「獲ってはいけない」と途上国の人々に言うことによって、住民がゾウに踏み殺されてもゾウを退治できなくて困っている。そういう現実がある。カムチャッカの話のように、うまく行っている例もある。知床でも、「ヒグマを叱る男」がTV番組で紹介された。そういう共存があることは世界遺産で評価して良いと思うが、世界遺産の文章には出てこない。MAB計画の中であれば出てくると思う。

◆まとめの一言

磯田: 現場の様子を知ることが出来て良かった。ユネスコ委員の活動は今月で終わりになるが、ユネスコエコパークの今後のますますの発展を祈る。また研究分野の融合が進むことを期待する。

ママードゥア: 来日後、初めて登山して、日本人が昔から自然を大切にしてきたことに感銘を受けた。これからユネスコエコパークの発展に、特に若い人たちを入れて貢献したい。

酒井: 人類の共有財産である自然と文化を守りたいと皆が思う。それには、環境共生型の持続可能社会を構築する必要があり、そのためには地域振興が必要。これには地域外を巻き込んだ意識改革や努力が必要なので、いろいろな仕組みや制度が生まれていて、その一つがユネスコエコパークである。

松田: (ユネスコエコパークと平和のつながりについて) MABや世界遺産は、国境を越えての登録を重視する。南北朝鮮の非武装地帯に国境を越えて登録する案が出たときは驚いた。結局、韓国のみの登録になったが。パレスチナ問題で米国がユネスコを脱退したときも、ユネスコは米国に忖度しなかった。民間ユネスコ協会の存在自体も平和につながることは皆さんご存じの通りである。

(文責: 港ユネスコ協会副会長 宮下ゆか里)

MUA40

創立40周年記念事業

2021年度港ユネスコ協会40周年記念

第五回 日本語スピーチコンテスト

■日時:2021年12月12日(日) 13:30~16:00

■会場:港区立男女平等参画センター
「リーブラ」ホール

今年の出場者数は過去最多の12名!! やったあ! と思わず、ガツツポーズでした。

第一回のコンテストは出場者7人で始まりました。MUAの先輩方は地道に、港区内にある沢山の日本語学校に足を運んで出場者を募ってきました。そのご苦労が大変なものであったろうことは容易に想像できます。そして、こうしたご苦労が実ったかのように、MUAの創立40周年を記念する今年の第五回目コンテストには、当初予定していた参加者数10名を上回る12名が登録されました。

出場者公募の方法としては区内の公共施設、大使館、インターナショナルスクール、日本語学校等へのパンフレットの送付に加えて、SNSやクチコミによる宣伝にも注力してきました。また、MUAが開催する他の行事、例えば習字、盆栽、盆石等の会場でも、参加者に対する日本語スピーチコンテストの前宣伝を欠かしませんでした。

今年は40周年記念ということもあり、司会者として出場者および見学者の皆さんに「40」に関する以下の質問をしてみました(答えはカッコ内):

- ・40年前 何が起きたか。(英国のダイアナ妃とチャールズ皇太子の結婚、ローマ法皇の初来日など)
- ・第40代天皇はだれか。(天武天皇。因みに今生天皇の徳仁様は126代天皇)
- ・第40代アメリカ合衆国大統領はだれか。(ロナルド・レーガン)
- ・40番目の元素は何か。(ジルコニウム)

そして、今年は小さな出場者が数人おりましたので、その子達に向けた質問として、



・アイスクリームを40個食べたらどうなるか。(お腹がいたくなる。)

と、半分冗談のような問い合わせもして、皆さんの緊張がほぐれたところでスピーチに入りました。

今年の最優秀賞者ネパール出身のパリヤル・ナビンさん(上の写真)は新聞配達をしていて、高齢のお婆さんから「すみません」と謝られました。この経験をもとに、なぜ謝られたのかを考えました。そして、お婆さんはきっと『「自分のために、暗い中、配達をしてくれている配達員に感謝し、苦労をかけてすまない』という気持ちを伝えたかった』のだ、という考えに至りました。

日本語では言葉の表面上の意味だけでなく、その裏にこめられている意図も汲み取ることが大切です。ナビンさんのスピーチからは、ちょっとした疑問をきっかけに深い考察を行い、ネイティブである私達さえ見落としがちな日本人の心情を理解した経緯が伝わり、これが審査員の先生方の心を掴んだのだと思います。

昨年から設けられた「会場特別賞」は見学している方々にも「これぞ!」と思うスピーカーに投票して頂く機会を与えるものです。ですから、来場した見学者の皆さんも各スピーカーの話にしっかりと耳を傾けることになります。

今回の日本語スピーチコンテストの受賞者のお名前、出身国、題名は以下のとおりです:

- ・**最優秀賞**／Pariyar Nabin(パリヤル・ナビン)ネパール:
「すみませんと200円」
- ・**港ユネスコ協会会长賞**／
Chen Huang(晨黄:シン・コウ)中国:
「感謝の心」
- ・**港区長賞**／Sarah Emily Harrison
(セーラ・エミリー・ハリソン)イギリス:
「本当に必要ですか?」



・審査員賞／Jomok Sahra Sicilia

(ジョモック・サラ・シリシア) フィリピン:
「人生は前向きに進んで行こう」

・優秀賞／Nguyen Thi Mai (グエン・ティ・マイ) ベトナム:
「日本人は冷たい」

・優秀賞／Yan Jinye (顔金葉:ガン・キンヨウ) 中国:
「私が見た日本」

・優秀賞／Lkhagvasuren Javzmaa
(ラグハスレン・ジャブザマ)
モンゴル:「コロナとわたし」

・優秀賞／Tran Thi Bien (トラン・ティ・ビエン) ベトナム:
「諦めない」

・優秀賞／Luke Chon (ルーク・チョン) 韓国:
「ルークのジレンマ」

・優秀賞／Maya Olivia Wheeler
(マヤ・オリヴィア・ウィーラー)
ニュージーランド/米国:「コロナ」

・優秀賞／Janine Chon (ジャニン・チョン) 韓国:
「どうしてコロナがすきじゃないか」

・優秀賞／Aibike Daiirbekova
(アイビケ・ダイル・ベゴヴァ)
キルギス共和国:

「What is Japan like to me?」

・会場特別賞／Sarah Emily Harrison
(右上の写真)

MUAの創設以来40年という歴史の歩みはとても語り尽くせないものがあります。審査結果が出るまでスピーカーと参加者が歓談して国際交流を深めます。先人達のご苦労を無駄にしないように、今後も日本語学習者が

その成果を発表する場としてこのコンテストを継続して開催し、国際理解を深める一助にしていきたいと考えます。

(文責:港ユネスコ協会
常任理事 田川純子)

